

断章 旭川のアイヌ語地名研究

(49)

高橋 基

明治十九年八月、上川仮道路が完成する。上川郡初の道路で、これによって、「アイヌの人たちの丸木舟により上川入り」していた和人の踏査・紀行が終焉する。なお、上川仮道路の改修事業は、明治二十年着工し、忠別太・空知間(十四里十町)は、明治二十二年九月竣工する。いずれも、樺戸集治監(明治二十年一月〜同二十三年六月は、樺戸監獄署の名称)の囚徒による、いわゆる囚人道路であった。また、岩見沢・忠別太間の駅通も明治二十二年八月に五駅通が開駅し、明治二十三年六月に上川道路が完成する。

本連載で繰り返し紹介している永田方正は、右のように激動する明治二十三年三月にこの神居古潭を調査したのである。

さて、掲載写真のポロレプシへ

(poro-rep-usi-pe 大きい・沖) についている。者(岩)は、カムイコタンの象徴的な大岩の一つで、写真のように湯水期はこの岩の上にも立てるが、石狩川が増水すると水没する。石狩川の水量を見るバロメーターにもなっている。

安政四年(一八五七年)、石狩川を丸木舟で遡上した松浦武四郎は、シキウシバ(荷物背負場)で上陸し、陸行すること二丁(約二八ほど)で、このポロレプシへ(表記はホロレフシへ)に出会う。「ホロレフシへ」川中に大岩一ツ有るなり。ホロは大なり。レフシへ

旭川のカムイコタン⑥



神居岩と神居岩のことは川中の岩のこと。此辺川中凡二十間位と成、其岩の高さも凡六七間より十間にも及

(以下省略)と、持参した野帳にも、シキウシバとこのポロレプシへのスケッチを描いている。余程印象が強かったであろう。

他方、明治二十三年に陸路カムイコタンに入った永田方正は、この岩

されたと貴重な記録を残した。冒頭の上川道路の開削、駅通の開設に最も深く関わった高畑利宜は、明治五年六月に開拓使使掌という役人として、札幌から丸木舟で十日目にカムイコタンの入り口の大淵(ポロモイ Poro-moy 広い・湾)のこ

と)に到着、ここからハルシナイまで陸行、その後三カ月余にわたり上川の調査をする。上川のアイヌの人たちの漁労については、「五月は八ツ目鰻の漁獲、六七月頃は鱒漁、十一月に至れば鮭魚を漁す(是は千四五百石漁獲すと云)と、復命書でもアイヌの人たちの八ツ目鰻の漁獲について触れている。



増水時…わずかに、頭が見える
湯水時…巖上に3人の高校生

について、次のように地名解をした。

「レプシユベ(repushbe 川中の岩)―直訳、沖の中に在る物の義。大岩川中に在り、故に名づく。此岩の上流に八目鰻夥しく群集するを以て此岩の名特に著はる。レプは沖の義なれども上川アイヌは大河の中をレプと云ふ。上川アイヌ某云ふ、古へ此辺は海中なりしを以てレプの称ありと」

明治二十一年十月、『北海道毎日新聞』の記者の野中掬泉は、神居古潭定住第一号の元札幌郡苗穂村戸長だった安藤彦松が、ここで八ツ目鰻をこの年約一万尾漁獲、乾燥して札幌で一尾五厘で販売したと記録する。神居古潭小学校の前身は、八ツ目鰻の漁業権利金で建設、また運営資金にもなり、「ヤツメの学校」として語り継がれたという。

永田方正は、この岩の上流に八目鰻が群集するので、この岩が特別視

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します



現・神居古潭